



日本カトリック正義と平和協議会 Japan Catholic Council for Justice and Peace

Prot. no. SC-JP25-3

2025年6月23日

日本カトリック正義と平和協議会
協議会一同
前会長 ウェイン・バーント司教

2025年6月23日沖縄慰霊の日にあたって

今年はアジア・太平洋戦争の終結から80年目の年となります。80年を遡る1945年の今日、6月23日、牛島満軍司令官と長勇参謀長が自殺し、3月27日の慶良間諸島米軍上陸から始まった、沖縄における組織的な戦闘が終了したとされています。しかしその後も米国施政権下を経て今日に至るまで、広大な面積を占める日米の軍事基地、朝鮮戦争やベトナム戦争、そして中東に出撃する戦闘機と隣り合わせの日常、軍用機墜落事故、米兵による暴力・性暴力事件、近年は有事を想定した避難訓練など、沖縄が「戦争」と離れ得たことは片時もありませんでした。

このように沖縄を「戦争」に縛り付け続ける暴力を支えるものとして、沖縄戦を日本軍の勇戦奮闘、民間人の自己犠牲と美化する、歪曲された歴史認識が存在します。

5月3日にも、「『ひめゆり平和記念資料館』の展示内容は『歴史の書き換え』だ」と事実と反する発言があり、発言者が謝罪に追い込まれることがありました。しかし「日本軍は米軍から沖縄の人たちを守った」とする発言内容は、撤回されていません。沖縄に駐留する陸上自衛隊第15旅団は、公式ホームページ上に「初代桑江群長沖縄県本土復帰に伴う訓示」（1972年）を掲載し、牛島軍司令官の辞世の句を引用した上で、「沖縄作戦において風土・郷土防衛のため散華された軍官民20余万の英霊」としています。2007年、日本の学校教育で使われる歴史教科書から「集団自決」が「軍の強制」であったとする記述が削除されたことも、忘れてはなりません。

事実は、日本軍とは天皇を守るための皇軍だったのであり、沖縄は「本土防衛のための捨て石」にされたのです。日本軍は、人々に米軍への投降を厳格に禁じ、捕虜になるくらいなら「自決」を選び取るよう強制したのです。

以上のような沖縄の歴史を踏まえ、私たちは訴えます。

現在、パレスチナ、ウクライナをはじめ世界各地で戦争や虐殺行為、そのための軍事拡大が行われ、戦後80年の今、「部分的な第三次世界大戦」の悲惨な光景を目の当たりにしていると、新教皇レオ十四世は述べています。（5月11日アレルヤの祈り）。こうした国際緊張の中、基地が集中する沖縄は再び「捨て石」にされかねません。日米政府には、沖縄から全ての基地を撤去するよう求めます。

激化する戦争や虐殺行為は直ちに終わらせなければなりません。と同時に、「真理なしに、真に平和な関係を築くことはできません」（教皇レオ十四世 2025年5月16日外交使節団との会見の挨拶）。偽りの上に平和な未来を作ることにはできません。私たちは、歴史の真実に責任を負い、いかなる犠牲もゆるさない真に平和な世界を実現しなければなりません。